



冬麗や虚空へ失せしもの数ふ
 死後生を思へばやさしき冬銀河
 ゆく秋や無韻につもる砂時計
 綿虫にかすかな湿り友の忌来
 鹿の眸に哀しさしんと無尽蔵
 登高や遙か佐渡にも旨き酒
 コンクリートに黙考の秋の蛇
 ルドビコ茨木西坂の丘の茸
 冬ざるる木乃伊の袈裟に金の色
 木枯の匂ひは脱脂粉乳よ
 舞茸にも重き脳や蝦夷の地
 幕間の深き澱みや秋の暮
 一粒の大き露なりわが天球
 鶏頭の花に潜める狂気かな
 八入の雨あがり荒庭耀けり

*

小林貴子
 奥山源丘
 岩井かりん
 久保美智子
 志摩晴樹
 清水追径
 唐澤南海子
 後藤行雄
 長島環
 島田邦彦
 山田一政
 丸山貴史
 桑原寿美子
 上條忠昭
 飯島千花梨

一声を月にはなちて熊穴へ
 畑守となるや雁割茄子でんと
 悪玉がやけに強くてギギウ鳴く
 強霜や原野は乳化するごとく
 無頼漢とバリカンの似て文化の日
 桔梗や鼓鉞やたらに逝く人へ
 天辺で割れるる柘榴猟奇的
 初稽古子らの搗きたるきなこ餅
 水神の独鮎沈めし沼錦秋
 跳炭や人は哀しく懐かしく
 大根引赤んぼを取りあぐるごと
 白式部添へたり妻のデスマスク
 煩惱を突き抜けてゆく枯木星
 難解なスッタニパータ年暮るる
 妖怪は隅っこが好き芒原

海野恵子
 米山節子
 高橋秀雄
 三品吏紀
 関禮
 丸山公子
 曾根原とうこ
 渡辺光
 瀬野史
 古田了
 土橋たか子
 松岡節子
 小林和子
 土屋隆
 池間キヨ子

京都や滋賀では食用にする。悪玉が強いとは、作者のような静かな善人はこの世界では苦しいでしような。人間界でようござんした。着目がいい。

強霜や原野は乳化するごとく 三品 吏紀

北海道の原野が一読迫る。霜が溶け出したのであろう。大平原に牛乳をぶちまけたような。眼がさめる生き方がある。

無頼漢とハリカンの似て文化の日 関 禮

発音だけしか似ていない。その強引な自由さが抜群。これが文化を連想させるとは迫力がいいねえ。この頃日本の「文化」も俗化したのであるほどと思う。

桔梗や鼓鉦やたらに逝く人へ 丸山 公子

おじゃんぼんの「じゃん」と鳴らす摺り鉦。あの役割は生

今月の秀句

一声を月にはなちて熊穴へ 海野 恵子

中島敦の『山月記』には孤狼が月に向かって咆哮するシーンがある。掲句は冬眠に入る熊。そんなことがありそうな気がしてくる。孤独なのか、習性に過ぎないのか。即物的な詠み方に注目した。日常詠のちまいました巧さから転じる予感がある。次第にスケールの大きな俳人になりつつある。その期待がもてると、選者の胸は一番躍る。作者の今年はそのような時期か。

る。そこに作者は、はっと驚く。これは携帯の上のたちまち消える字面でも駄目であろう。誌上が楽園である。大根一赤んぼ。優しい。

白式部添へたり妻のデスマスク 松岡 節子

既婚者には生涯に一度はある。人はどうこういえない。この主人公の思いで。死とは何であろうか。こんな日が来ることは実感できなかつたであろう。いまだ夢である。これから夢が始まることもまだ実感できない。白い式部の実を添える。万分の一の感謝の思いだ。ささやかなことができただけでも幸せと、ガザの戦場を思い、ウクライナの墓場を思い、気持ちのバランスをとる。こんな言い方も批評家の言葉に過ぎない。なにもわからないまま楯は送り出される。

煩惱を突き抜けてゆく 枯木星 小林 和子

人は煩惱の塊。欲がその種。煩惱の最中の句でないとな鮮やかな光景は描けない。うそが九九パーセント。僅かにパーセントがこの真実にぶつかると。毎日煩惱の塊に顔をぶつけてうんうん唸っている者にはよくわかる。「枯木星」とは枯木の間から見上げた星。生きているさまはこれ。枯木は煩惱の化身である。るにいるいたる枯木に囲まれ僅かに見上げた空の星。救いであろう。纏る思いであろう。

難解なスタッニパー夕年暮るる 土屋 隆

セイロンに伝わる大蔵経だという。高僧の教え、経文を集めた仏典の集成。中国には大部な一切経が伝わるというが、

者の「精神」を別世界の「魂」に替える際の大事な演出。お坊さんが「喝」という途端にあの世へ旅立つ。桔梗が楚々と天辺で割れるる 柘榴 獵奇的 曾根原と「

センスがいい。「獵奇的」とはお見事。柘榴が歯を剥きだして「とうこー」とでもにやにやしたのか。ぞくぞくする。テレビの見過ぎ、漫画の読み過ぎ。現代はお化けが跳梁する時代。

初稽古子らの搗きたるきなこ餅 渡辺 光

穏やかなお正月。餅つきもまた初稽古のうち。

水神の独鈷沈めし沼錦秋 瀬野 史

蔵王ドッコ沼詠。古来の風景に格調がある。絵葉書のことば「錦秋」が生き生きとして躍動感がある。手柄あり。

跳炭や人は哀しく懐かしく 古田 了

只今のわが心境を代弁していただいたような句でございませ。跳炭のしみじみ感にもちょっと古風で、文人風で、感性の良さがある。日頃連句で培った心映えが俳句に反映して読み手を抱擁する柔らかさがある。郡上の人。

大根引赤んぼを取りあぐること 土橋たか子

作者は昨年から本誌へ投句開始。それがよかった。諏訪在住の長年のベテランである。投句しないと微妙な感性が育たない。句を読むときは意味を解し大難把に過ぎる。ところが誌上で見る自句は生きものだ。句同士の微妙な張り合いがあ

作者はセイロンの大蔵経に挑戦している。早世した妻への供養であろう。放物線を大きく描くような句の調子に共感する。少年時代の作者をよく知るが、兄土屋裕はわが竹馬の友。難病パーキンソンに苦しむ。いつも私の中には裕の佛がある。

妖怪は隅っこが好き 芒原 池間キヨ子

宮古島の作者。三島信子が逝き、渡久山和子と作者が元氣なのがうれしい。宮古島は日本の原点の地とは柳田国男の『海上の道』（岩波文庫）を繙くとわかる。南方から黒潮に乗る稲がこの島に流れ着き、日本列島を北上したとは目が覚める説である。芒原の広がる島の隅っこには今も妖怪がいる。妖怪好きでは、上田の牧野繭に「妖怪の郡や墓塚のとはくまで」がある。宮古島詠ではないが、気になっている。太平洋と東シナ海に囲まれた宮古島の妖怪よ、お達者で。

他に推薦候補作をあげる。

穂田や短く決めるアンコール	森山 夕香
擲つにあらぬ地球や冬林檎	岩上 諒磨
頂きに生きる馬陸秋の声	五味 真穂
隙間風天の岩戸を出できたり	小谷 一夫
夫に靴磨かせてをり文化の日	玉木 愛子
真ん丸は無敵の形芋の露	山田 寿子
冬晴やわが人生は仕上げどき	遠藤 君子
秋蝶よ道迷ふ吾を見捨てるな	河西 将
焼きたてのピザにふりまく菊なます	柴田 洋子